

# 佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## 何で私が・・・

長尾 篤

初雪。十一月の東京では五十四年ぶり。私も青森から上京して二十五年間で初めての経験であった。

今年は残暑もなければ秋が消え、いきなり冬に突入してしまっ

たようだ。もともと日本には四季があり折々の景色・風物詩・食材が彩りを添えてくれていた。年々季節を感じる余裕もなくなっているのだが、春と秋が短くなっていることは寂しい限りだ。

この「初雪」で思い出すことがある。平成六年、私は佑啓会の採用試験を受けた。前日からの大雪で、道路はアイスバーンになり試験に遅れないか心配しながらタクシーに乗った。何とか間に合ったものの就職しなければという思いばかりが強く、筆記試験も面接も自分なりの力をだせたのか不安だった。

後日、ふる里学舎から届いた封筒を開けると採用通知書、飛び上がって喜んだ。「俺の力もまんざらではない」と思っていたが、その後の宴会で理事長（その当時は施設長）から、「大雪の中で試験にきた人は無条件で採用した」と信

施設長にもなれず、お前の友人が施設長になったと聞いたときすごく悔しかった。これでお前を施設長にできて嬉しい―自分が何気なく話した昔のことを理事長は自分のことのように感じてくれていたと分かった。

じたくない話を聞いた。落ちる人のない試験だったのだ。採用されてからも色々なことをやらかしていたので、さらに自信を失くした。

働き始めから、いつも先輩がイジジと遊んでくれた。上司からは「土方のように働け」「辞めてもいいぞ」当時はブラックなどという言葉もなかった。誰でも入れる仕事場は簡単にやめちゃだめだと我慢していたが、やっぱり同僚と暴走行為の真似事をしたり、通勤時にオートバイごと溝にはまった

り、訳のわからない機械を通販で注文し、職場宛に送らせてしまったり、トラクターを落としたり、両手でも足りない出来事が原因だったのか。それとも私だけ特別だったのか今度聞いてみよう。

十年程前、私の青森の友人が若くして「施設長」になった。その話を何気なく理事長に話していた。この4月、千倉オーブンの時に、「俺と一緒に働いていたお前が、

ということでは私は四月から、千倉の児童入所施設・生活介護・単独型短期入所を含めた施設長として働かせて頂いている。市原市の自宅から千倉まで通い始めて半年以上が経過した。和田浦からの異動になり二十分ほど遠くなる。通勤時には、自分が施設長という役職でいいのだろうかとも今も考えている。入所施設ということもあり夜も落ち着けない。オーブンしてまだわずか。何かあったらと思うと気が気ではない。その月数に甘えるわけではないが、何もかもが手探りの中での施設運営である。ある時は火災報知機の誤作動で放送がかかり、地域住民全員集合、消防車が駆けつけるなど、思いもよらないことが起こったりする。心配事ばかりでタバコの本数も増えてしまった。家計のことを考え安いものにしたのに・・・。

相談所で保護されていた子供たちで親からの虐待やネグレクトがほとんどだ。体も小さくかわいいK君は甘えも独占欲も強い。若い女性職員の中でも気に入った職員にべったりで、膝の上に座り全く動こうとしなかった。他の子供がその職員に話しかけるだけで、大泣き、相手を叩く、物に当たること

そんな折、8月に東京大学のゼミの学生さんが千倉に来たことは前回の佑啓で紹介し、感想も掲載させて頂いた。このときも何で新米施設長のところに来るのか。富士山の頂上のような人たち、要するに雲の上の人たちと思っていた。「何でわたしが東大に」という塾のキャッチコピーをビリビリに破いてみたいと思っている人がたくさんいるかどうかは別として、私の頭の中では、福祉と東大が結びつかない。でも、子供たちとの宴会で飲んでしまえばみな同じ、宴会なれた子供たちともじゃあいはじめた様子を見ると、何だ人間は子供と大人、女と男しかないと思えばいいんだと気が楽になった。とはいえ、感想文を読んだとたん再び東大がさんさんと輝き始めたのだった。ちなみにゼミで出版した「障害者のリアル・東大生のリアル」という本が売れてるそう

な。みんな悩んで大きくなるんだなあというのが感想。

施設長としての才がないことを棚に上げているだけだったら先に進めない。ここには、成長している進行形の子供たちがいる。今日も学校から帰れば暗くなるまでボールを蹴りあっている。夏休みなど一日じゅう中庭で遊び、特設のプールは大人気だった。周辺の住民からはこどもたちの声に元気づけられる。という人もいて心強い。周囲に支えられながら、生きてゆくのが人間だ。私は親の愛情を受けるのが当たり前の環境で育つことができた。眼の前にいるの

はそれが叶わなかった子供たちである。家に帰るとか、親に会いたいとも言わない彼らの心の底には容易に到達できない。理事長からは彼らが成長していく中で、一番大切なことは皆に可愛がってもらえるように育てていくことを話を聞いた。私たちは「生懸命に愛情を注ぐ」という今でしかできない仕事にやりがいをもりたい。生活をもにするといいっても、いずれ果立ってゆくだろう。ここですごした時間が彼らの人生によい思い出として残るよう頑張ろう。

ふる里学舎やふる里学舎和田浦で働き二十三年が経った。先のとおり、数々の失敗も重ねてきたが、皆に守られ、ここで育てられてきた。わが子は大きくなり、仕事で再び子育てをすることになった。施設長とはおこがましいが、家族づくりと思えばいい。そうだと親父のように子供の水先案内をする存在だ。今から東大は絶対無理だからこう言えるようになるう。

「なんで私が灯台に」  
(ふる里学舎千倉 施設長)

## 娘の人生



我が家には、現在中学二年生になる一人娘がいます。

平成十四年七月六日に二千四百二十四g。少々小柄ではありましたが、無事に生まれて来てくれました。生まれてすぐに大医学病院を紹介され、染色体異常である事が分かりました。先生から病気の説明を聞いていくうちに「何故、私の子が？」という思いが大きくなり、育てる事に対して不安しかありませんでした。

そんな中、療育施設であるマザースホームを教えて頂き、一歳を過ぎた頃から通いはじめ、同じ悩みを持つお母さん達と知り合う事ができ、私の中の不安が少しずつ減っていきました。その後、公立の保育所に通い、現在は市原特別支援学校に在籍しています。入学してすぐにデイサービスは利用せず、小さい頃からお世話になっていた託児所に預けていましたが、これから先の事を考えてデイサービスを利用する事を決めました。そんな中、お友達にふる里学舎さんの事を紹介してもらいました。

うちの子は、初めての事で初めて会う人にとっても敏感で、一度苦手意識を持つと「いや！」となってしまうので通う事になっただ日は環境に馴染めるのか、とても不安でした。そんな不安もよそに、本人はとても気に入ったように安心しました。今では、

「今日は、ふる里さんの日？」と聞くと楽しい様子にしています。迎えに行くと、先生とかくれんぼをしたり、お手伝いをしていたりと帰る間際まで楽しんでいきます。



放課後等デイサービスとは別に、ふる里学舎さんでは交流ハイキングやスポーツ大会、夏祭り、お楽しみ会など沢山の行事もあり、いつも家族で楽しく参加させて頂いています。今後、学校を卒業して、いずれは施設の作業所で働く事になると思います。本人の為に、少しでも通い慣れた場所でも働く事ができれば良いと思っています。いつまでも、子供とは一緒にいられません。一人っ子なので先の事を考えれば不安もいっぱいですが子供の人生に最後まで付き合つ事は出来ませんが、少しでも『楽しく安心して暮らせる場所』を探す事が、親である 私達夫婦の責任だと思っています。

(ふる里学舎五井保護者)



悲願達成の興奮冷めやらぬ中、佑啓会初の号外が配られました。その紙面を、ご紹介します。

## 悲願V達成！



ついにこの時が訪れた。赤い大輪の中心から里見理事長が宙を舞う。

第二十四回千葉県知的障害者福祉協会職員交流バレーボール大会・決勝戦で八日市場学園をストレートで下し、念願の優勝カップを手にした。

クジ運は最悪と思われた。目下八連覇中のみずほ学園との対戦となった。過去の対戦では善戦するもあと一歩及ばず、ストレート負けを喫してきた。当然、内外からは「初戦敗退」の予想も聞かれた。しかし理事長、選手たちはむしろ一回戦にこそ「勝機あり」と感じていた。そして迎えた第一セット、個人力では格上の相手に対し、持ち前の総合力を発揮しリードを奪う。追いつかれても集中力を切らすことなく、このセットを奪う。勢いそのままに第二セットも序盤こそリードするも、ディフェンディングチャンピオンの意地と力で第二セットはみずほ学園に。この時点で過去の経験から、流れはみずほへ行くかと思われたが、新戦力、新布陣で臨んだ「新生」ふる里学舎のコート内には勝つ為の気力が満ち溢れ、それを見守るベンチには今までにない安心感があつた。

## 融合するベテランと新戦力

新セッター、川島選手から上がった正確なトスから、エース里見選手を中心に大高選手らが確実にスパイクを相手コートに突き刺した。また、今大会に向けて強化してきたのは、課題であったサーブレシーブだ。チーム最年長、林キヤブテンを中心としたレシーバー陣の確実なカットが攻撃に繋がった。また、最強の攻撃力を誇るみずほ学園のスパイクに對しても、中川選手、新加入の石井選手の好反応、巧みなフライントや味方のカバーには、井上選手、高木選手が対応した。また、中野選手らの強力なサーブが相手を崩し、チャンスボールが返ってきた。

イクを相手コートに突き刺した。また、今大会に向けて強化してきたのは、課題であったサーブレシーブだ。チーム最年長、林キヤブテンを中心としたレシーバー陣の確実なカットが攻撃に繋がった。また、最強の攻撃力を誇るみずほ学園のスパイクに對しても、中川選手、新加入の石井選手の好反応、巧みなフライントや味方のカバーには、井上選手、高木選手が対応した。また、中野選手らの強力なサーブが相手を崩し、チャンスボールが返ってきた。



## 歓喜そして涙

そしてマッチポイント、集中を切らさない選手を余所に、ベンチ、応援陣の温度は最高潮に達していた。そしてポイント。歓喜の輪は選手、ベンチ入り乱れ、抱き合い、涙する者もいた。

気が付けば、会場全体がどよめいていた。

二回戦以降はリードを許す場面がありながらも、勢いそのままに一気に頂上まで駆け上がった。まさに全員バレーが結実した瞬間であった。

祝勝会では冒頭、理事長から「最高の一日。仕事もスポーツもチームワークが一番。」と話があり、林キヤブテンからは「練習も大会もバレーをさせて頂いている間、現場を守ってくれた職員がいるからこそ勝利。」と、まさに法人全体でつかった勝利であることを表した。

## 追われる立場

次年度からは初めて追われる立場となる。「王者」ふる里学舎はどんなドラマを見せてくれるのか。バレーボール部第二章が始まる。

優勝 ふる里学舎  
準優勝 八日市場学園  
福利厚生賞 みずほ学園

最優秀選手賞

川島佑果子(ふる里学舎五井)

## ふる里学舎バレー部

## Vまでの軌跡

長い道程であった。

ふる里学舎創立と同時に誕生したバレーボール部。この日を迎えるまで苦難の道のりを歩んできた。草創期はバレー経験のない者が大半で、練習を重ねてきた。技術で足りない部分を佑啓会が誇るチームワークで補いながら戦ってきたが、地区予選敗退で千葉ポートアリーナへは理事長しか出席しないという低迷期もあった。

何とか勝ちたい一心で外部コーチを招聘し基礎から鍛え直し、徐々に底上げに成功した。しかし同時に、仕事で上司に怒られるだけでなく、バレーでもコーチに怒られることに耐えられず、バレーシューズを脱ぐ職員も出るなど、代償も払ってきた。

第十一回大会には県大会決勝まで駒を進めたが、時間切れ引き分けとなりしもふさ学園との同時優勝を飾り、以降は単独優勝が悲願となった。

その後は採用した職員がまたまたバレー経験者という「偶然」が相次ぎ、技術とチームワークの歯車は

効果的に回りだした。それでも古豪・大久保学園、新勢力・みずほ学園の牙城を崩せず、苦杯を舐めてきた。特にみずほ学園は八連覇中であり、県内全体で「どこがみずほを破るか」に注目が集まっていた。

追い風もあった。

杜のホール竣工により、練習機が増えた。また悲願達成を願う理事長の命により、この秋、飯田ヘツドコーチが就任したことで練習は更に加速した。また、大会直前に新戦力・川島セッターの加入により、史上最強の布陣が完成した。

法人ホームページに号外を掲載しています。是非、ご覧ください。



## 編集後記

今年は秋を飛び越えての急な寒さとなっていますが、十一月二十四日に初雪が観測されています。十一月降雪は、五十四年ぶりとニュースで報道されていました。年々異常気象が増えてきており、体調に留意して年の瀬をお過ごしください。

それでは編集後記を書き終えて、職員旅行で北海道へ行ってきます。大高 賢人